MATSURI MEN 神域の作法 — 第一集 —

伊勢神宮 正式参拝の書

御垣内参拝と、御神楽奉納のすべて

浜参宮より、外宮、内宮へ ― 正しき順路

マツリメン

MATSURI MEN ｜ 大人のスピ活

第一章

なぜ「二見 → 外宮 → 内宮」なのか

お伊勢参りには、千年を超えて受け継がれた「順路」がある。まず**二見浦で心身を清め(浜参宮)**、次に衣食住の神を祀る**外宮(豊受大神宮)**へ、そして最後に天照大御神の御鎮まる**内宮(皇大神宮)**へ——。これは単なる巡回の効率ではない。**「清めてから、まみえる」「日々の糧への感謝を先に、大いなるものへの感謝を後に」**という、この国の祈りの思想そのものである。

壱　二見興玉神社 — 浜参宮(はまさんぐう)

古来、伊勢へ参る者は、まず二見浦の清き渚で潮を浴び、心身の穢れを祓ってから神宮へ向かった。これを**浜参宮**という。夫婦岩で知られる二見興玉神社の御祭神は、**道開きの神・猿田彦大神**。今日では、同社に参拝しお祓い(無垢塩祓い)を受けることが、禊に代わる作法とされる。**「道を開いてから、参る」**——旅の初めに、これほどふさわしい社はない。

続いて**外宮から先に参る**のは、神宮の祭典が古来「外宮先祭」——まず外宮で祭りを行う——のならわしであることに倣うため。片参り(どちらか一方のみの参拝)は避けるべきとされてきた。

■ 賢者の心得

順路とは、神域に入るための「呼吸」である。二見で鎮め、外宮で日々に感謝し、内宮で大御神にまみえる。この流れを踏む者と踏まぬ者では、御垣の前に立ったときの心の静けさがまるで違う。

第二章

御垣内参拝 — 御幌の、その奥へ

一般の参拝者は、御正宮の**御幌(みとばり)と呼ばれる白い絹の帳の前**で手を合わせる。だが、その帳の奥——幾重の玉垣に守られた**「御垣内(みかきうち)」**に参入して参拝する道がある。それが御垣内参拝、通称**特別参拝・正式参拝**である。

参拝の資格(いずれか)	
一	当日、**式年遷宮の御造営資金**を一定額以上奉納し、「特別参宮章」の授与を受ける(数千円程度から。額により参入位置が異なる)
二	**伊勢神宮崇敬会**の会員となり、参宮章付きの会員章を受ける

※予約は不可。祭典執行時は参入できない場合がある。特別参宮章は有効期限内なら外宮・内宮の両宮で各一回使え、一人一枚。

当日の流れ	作法
① **神楽殿にて**	神札授与所で**「御造営資金の寄付をさせていただきたい」**と申し出て記帳・奉納し、特別参宮章を受ける。**「特別参拝がしたい」とは言わないのが作法**——参拝はあくまで、遷宮を支える志への返礼である。
② **御正宮にて**	一般拝所の左方**「南宿衛屋(みなみしゅえいや)」**の神職に参宮章を提示し、住所・氏名を記帳。
③ **御垣内へ**	お祓いを受け、神職の先導で外玉垣南御門より参入。白い御白石を踏み、所定の位置で**二拝二拍手一拝**。

■ 服装 — ここで最も多くの人が断られる

礼服(ブラックフォーマル)が正式。男性は濃色の背広に白シャツ・ネクタイ・革靴、女性はそれに準ずるフォーマル。判断はその場の神職に委ねられ、参宮章を持っていても服装で断られることが現にある。御垣内は玉砂利のためヒールは不可。**迷ったら、礼服。**それが大御神への敬意である。

なお、御垣内では**個人の願い事ではなく、日々への感謝と世の安寧を祈る**のが作法とされる。個人の祈願は、次章の御祈祷(御饌・御神楽)にて託すのが正しい役割分担である。

第三章

ご祈祷 — 願いを、神前に奏上する

神宮のご祈祷は、内宮・外宮それぞれの**神楽殿**にて、二つの形で奉仕されている。 お祓いと祝詞の奏上により願いを大御神に届ける「**御饌(みけ)**」(約15分)と、それに加えて 神宮専属の楽師による雅楽と舞が奉納される「**御神楽(おかぐら)**」(約25〜40分)である。 御神楽の舞は、春秋の神楽祭を除けば、奉納した者だけが目にできる。

種別	初穂料	登殿人数	内容
御饌	5,000円以上	5名まで	お祓い・祝詞奏上・神饌のお供え
大御饌	8,000円以上	8名まで	
別大御饌	10,000円以上	10名まで	
御神楽	15,000円以上	15名まで	倭舞
大々神楽	50,000円以上	50名まで	倭舞・人長舞
別大々神楽	100,000円以上	100名まで	倭舞・人長舞・舞楽一曲
特別大々神楽	500,000円以上	350名まで(外宮180名)	倭舞・人長舞・舞楽二曲

※受付は神楽殿のご祈祷受付にて随時(概ね午前8時〜午後3時30分)。予約不可。100名以上の団体は事前に神宮司庁へ連絡。登殿人数により初穂料が変わる場合あり。

当日の作法	心得
申し込み	備え付けの申込書に住所・氏名を記入し、初穂料を添える。願意(家内安全・商売繁昌・心願成就など)をひとつ選ぶ。
殿内にて	畳に正座。**「お祓いをします」の声で頭を下げ、祝詞の奏上中は深く頭を垂れて願いを込める。**携帯は電源を切る。殿内は撮影禁止。
服装	御垣内参拝ほどの規定はないが、神前に正座する場である。フォーマル寄りが礼にかなう。
撤下品	ご祈祷の後、お神札などの撤下品を拝受する。神棚がなくとも、目線より高い清らかな場所に東向きか南向きでお祀りする。

■ 賢者の心得 — 役割で使い分ける

御垣内参拝は「感謝と誓い」の場、御祈祷は「願いを託す」場。この二つを同日に納めるのが、経営者の正式参拝の型である。祈りの三文型——感謝、誓い、願い——を思い出されよ。神は、行動する者の一歩に力を貸す。

ITINERARY — 一日の型

第四章

正式参拝 — 一日のモデル行程

刻限	場所	次第
7:30	二見興玉神社	浜参宮。夫婦岩を望み、参拝。お祓い(無垢塩祓い)を受け、心身を清める。朝の澄んだ潮風の刻がよい。
9:00	外宮 神楽殿	御造営資金を奉納し、特別参宮章を拝受。
9:20	外宮 御正宮	南宿衛屋に参宮章を提示、記帳とお祓いののち**御垣内参拝**。日々の糧への感謝を捧げる。別宮・多賀宮にも参る。
10:30	内宮へ移動	車で約15分。逸る心を鎮める間(ま)とする。
11:00	内宮 御正宮	宇治橋を渡り、五十鈴川御手洗場で手を清め、**御垣内参拝**。感謝と、誓い。
11:45	内宮 神楽殿	**御神楽(または御饌)を奉納**。祝詞に願いを託し、倭舞を拝す。別宮・荒祭宮にも参る。
13:00	おはらい町	直会(なおらい)。神域で頂いた気を、糧とともに体へ納める。

■ 覚えおくべき五箇条

一、服装は礼服。迷いは敬意の不足と知る。
二、神楽殿では「御造営資金の寄付を」と申し出る。「特別参拝を」とは言わない。
三、御垣内では感謝と誓い。個人の願いは御祈祷に託す。
四、祭典の日時により参入できぬことがある。旅程には余白を持つ。
五、片参りを避け、外宮より内宮へ。順路は、祈りの呼吸である。

次回の**式年遷宮は令和15年(2033年)、第63回**。二十年に一度、社殿のすべてを新たに造り替え、大御神にお遷りいただく——1300年続く、この国最大の祭である。前回・第62回の費用は約550億円、うち約220億円が全国からの寄付で賄われた。**御垣内参拝の奉納は、この永遠の更新を支える一粒となる。**あなたの参拝そのものが、千年先へ祈りの場を残す行いなのである。

CLOSING

結び ― 呼ばれた者へ

正式参拝とは、特別な人間のための儀式ではない。**遷宮という「永遠の更新」を、自らの奉納で支えると決めた者に開かれる道**である。礼服に袖を通し、玉砂利を踏み、白い帳の奥で頭を垂れるとき――あなたは千三百年の列に、静かに加わる。

この書を手にしたということは、すでに、呼ばれている。

マツリメン

MATSURI MEN ｜ 大人のスピ活

本書の続き――全国の「経営者が参るべき社」は、YouTubeとLINE公式にて。
LINE友だち登録で、白狐**こんまる**より御札・御朱印を授与しております。

【おことわり】本書はマツリメンが独自に編集した参拝の手引きであり、伊勢神宮(神宮司庁)・伊勢神宮崇敬会・二見興玉神社の公式刊行物ではありません。 初穂料・受付時間・参拝要件等は変更されることがあります。参拝の際は各社の公式案内にて最新情報をご確認ください。 本書は御利益を保証するものではなく、伝統的な作法についての一つの読みとしてお届けするものです。

MATSURI MEN 謹製 ｜ 無断転載を禁ず